

平城宮跡第194次調査 現地説明会資料

奈良国立文化財研究所
1988年11月12日

浅川 滋男

1. 調査の概要

第1次朝堂院地区以西の平城宮域は、馬寮地区（現在の資料館のあたり）を例外として、平城宮内でもあまり調査が進められていない地域の一つに数えられる。馬寮以外では、その東に接する4,300㎡の範囲が、昭和42年に第37次調査として発掘調査の対象となっている。この第37次調査では、南北棟の礎石建物1棟、東西棟の掘立柱建物2棟、柵3条、溝2条、井戸1基などの遺構が検出された。

第194次調査は、この第37次調査区東半部の真北に連続する1,000㎡（25m×40m）の範囲を対象として、本年10月1日よりスタートした。当調査区における主要な課題の一つは、第37次調査区のなかにあつてさらに北へのびる南北棟の礎石建物の規模を確認することである。ところが、調査の進展にしたがつて、この礎石建物が、第194次当初の発掘区にさえ納まりきらない長大な遺構であることが判明した。このため、発掘区を南北両方向に拡張し、さらに広範囲な調査を継続中である。

以上のように、本調査はいまだ折り返し地点を過ぎていないような中途段階にあるが、じっさいに発掘中の遺構と遺物、および発掘の技術と手順について、簡単な説明をおこないたい。

2. 長大な礎石建物の発見

(1) 礎石建物の平面と規模

第37次調査区内で発見された礎石建物（遺構番号SB5300）は、東西両面に底のついた梁間4間（12.0m）の南北棟である。桁行方向は、同調査区において7間半ぶんだけが検出されていたが、今回の調査によって、じつに21間（86.4m）に及ぶことがほぼあきらかになった。

(2) 根石と布掘り

この礎石建物の遺構からは、礎石そのものが検出されているわけではない。礎石は、転用されて、すでになくなっているのである。しかし、礎石の底に敷いた根石が多数残存している。この礎石建物では、これらの根石群が、帯状に掘られた浅い穴のなかにほぼ等間隔に連続する。このような帯状の穴は、「布掘り」と呼ばれることがある。礎石の据え付け穴を「布掘り」にする例は、きわめてめずらしい。

(3) 第一次朝堂院東第2堂との比較

平城宮内でこれまで発見された礎石建物のうち、もっとも長大な例は、第一

次朝堂院の東第2堂（遺構番号SB8550）である。第194次調査で発見された礎石建物（以下SB5300）は、平面形式・規模の両面で東第2堂（以下SB8550）に酷似している（別表参照）。すなわち、両者は、ともに東西両庇付きの南北棟で、梁間4間、桁行21間。ただし、規模の面では、SB8550のほうがやや上回り、梁間は13.6m、桁行は92.4mとなる。この規模の差が1間の寸法差によることは、いうまでもない。また、基壇の高さは、SB8550で約1.2mと推定されているが、SB5300の場合、それより高くなることはまずありえない。創建の年代については、SB8550が神亀元年（724）頃とみられるのに対して、SB8550は出土瓦からみてやや遅れ、天平年間（729～749）に下る。
5300

3. 遺物

(1) 軒瓦と鬼瓦

Ⅱ期からⅢ期にかけての類型が出土。恭仁京遷都前後の2グループに分けられるので、屋根を葺替えた可能性もある。

(2) 墨書土器

「来」と書いた土器片が出土した。意味不明。

4. まとめ

(1) 礎石建物の性格と年代

規模・建築形式から考えて、一般的な官衙（役所）とはみなしにくい。天皇と関係する重要な建物群の一部であるかもしれない。年代は、出土瓦からみて天平年間と考えられるが、それは、平城宮造営当初まで遡るとする第37次調査の見解と異なる。

(2) 殿舎の比定とその問題点

殿舎の比定は、かなり困難な状況にある。以下のような候補を想定できるが、それぞれに問題点が多い。

①「西朝」説 —— 『続日本紀』養老元年（717）に記載。年代と位置に問題。

②「西池宮」説 —— 『 』天平十年（739）に記載。年代は一致。しかし、西池と礎石建物は溝で区画される。

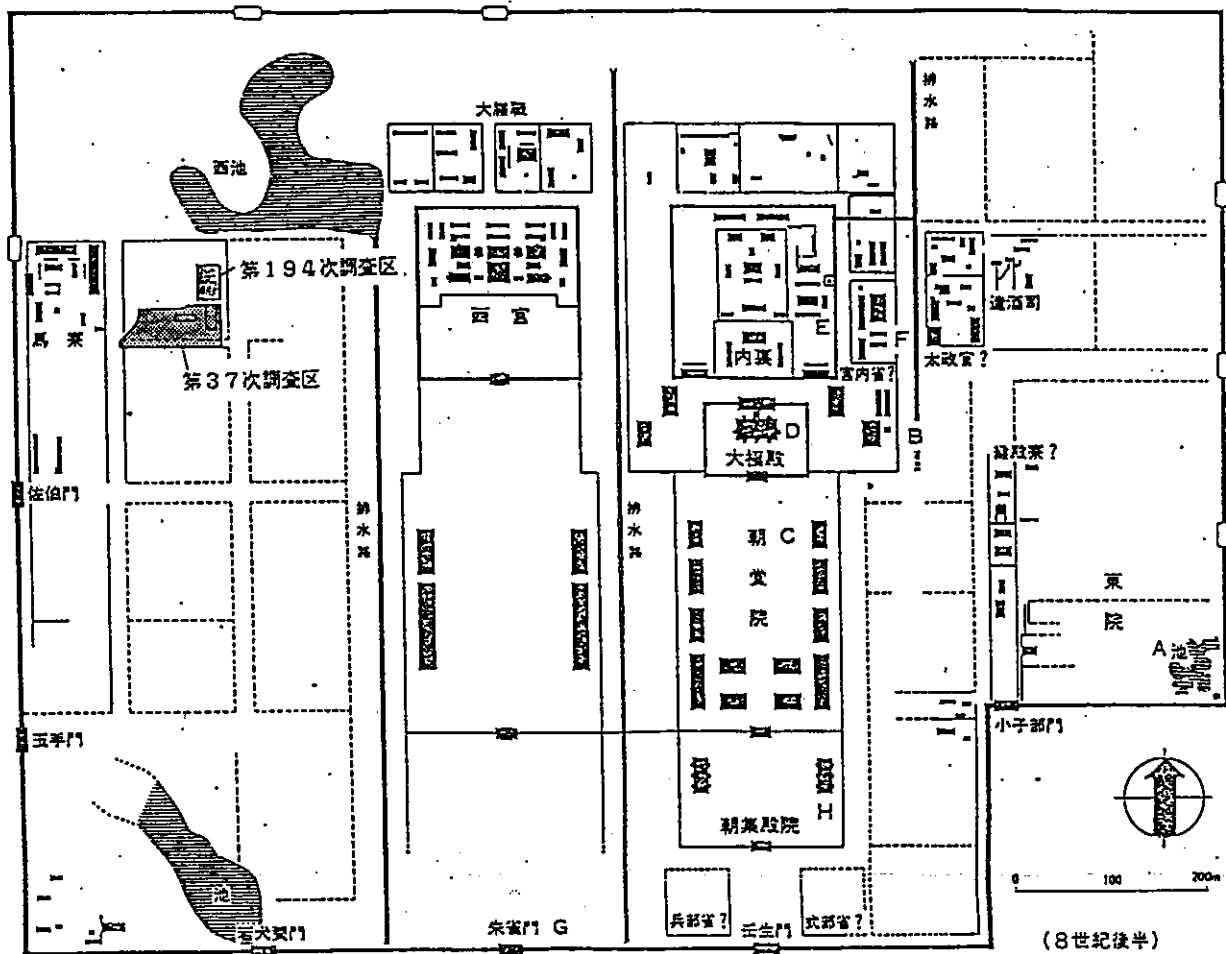
③「西宮」説 —— 称徳天皇の時代に特有。第2次内裏北辺から木簡出土。西宮と内裏は一体のものか。

④「武徳殿」説 —— 平安宮宮城図の該当地域近くに武徳殿がみえる。しかし、「七間四面」の記載あり。21間とはおおきく隔たる。

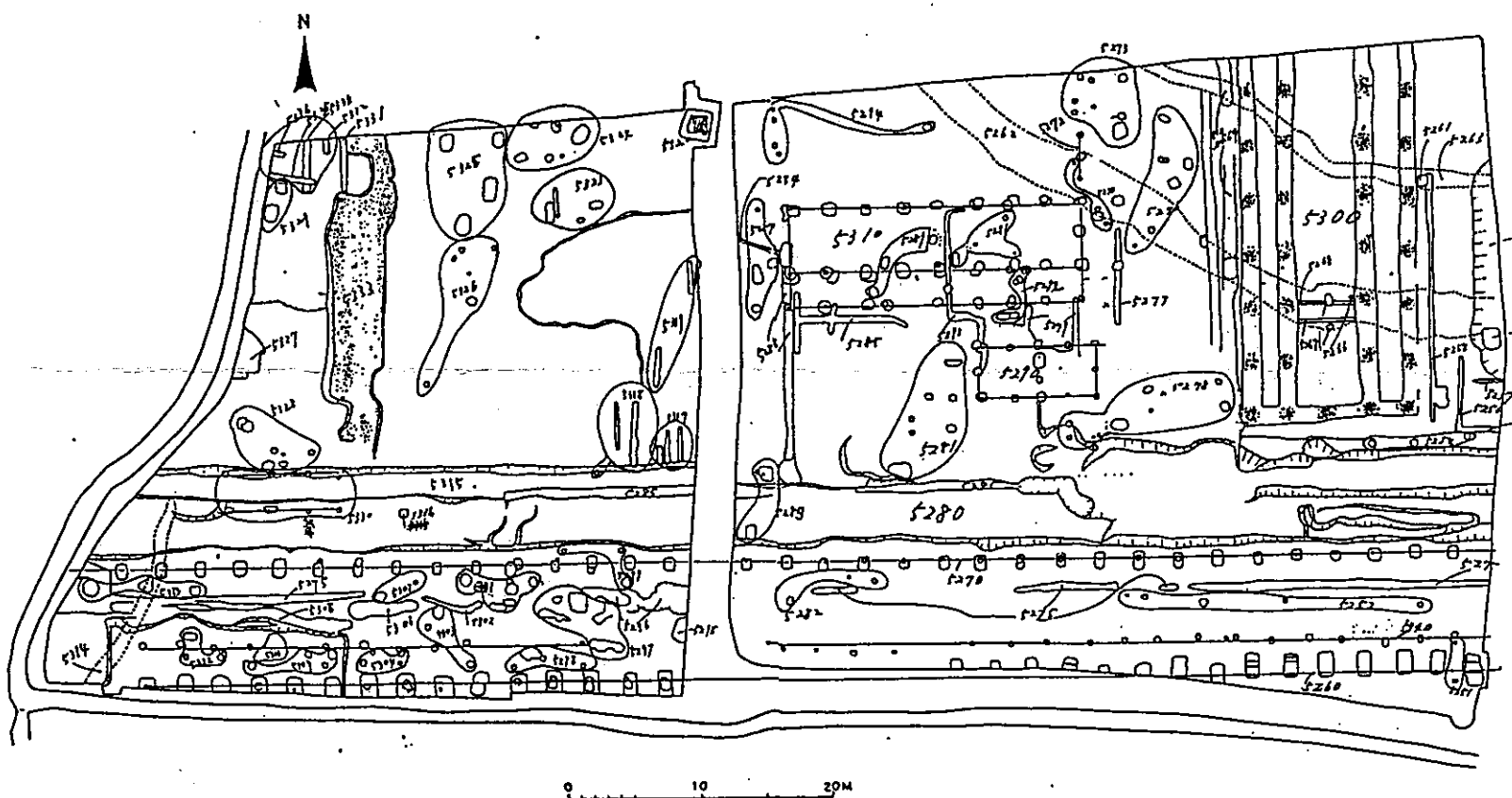
(3) 今後の課題

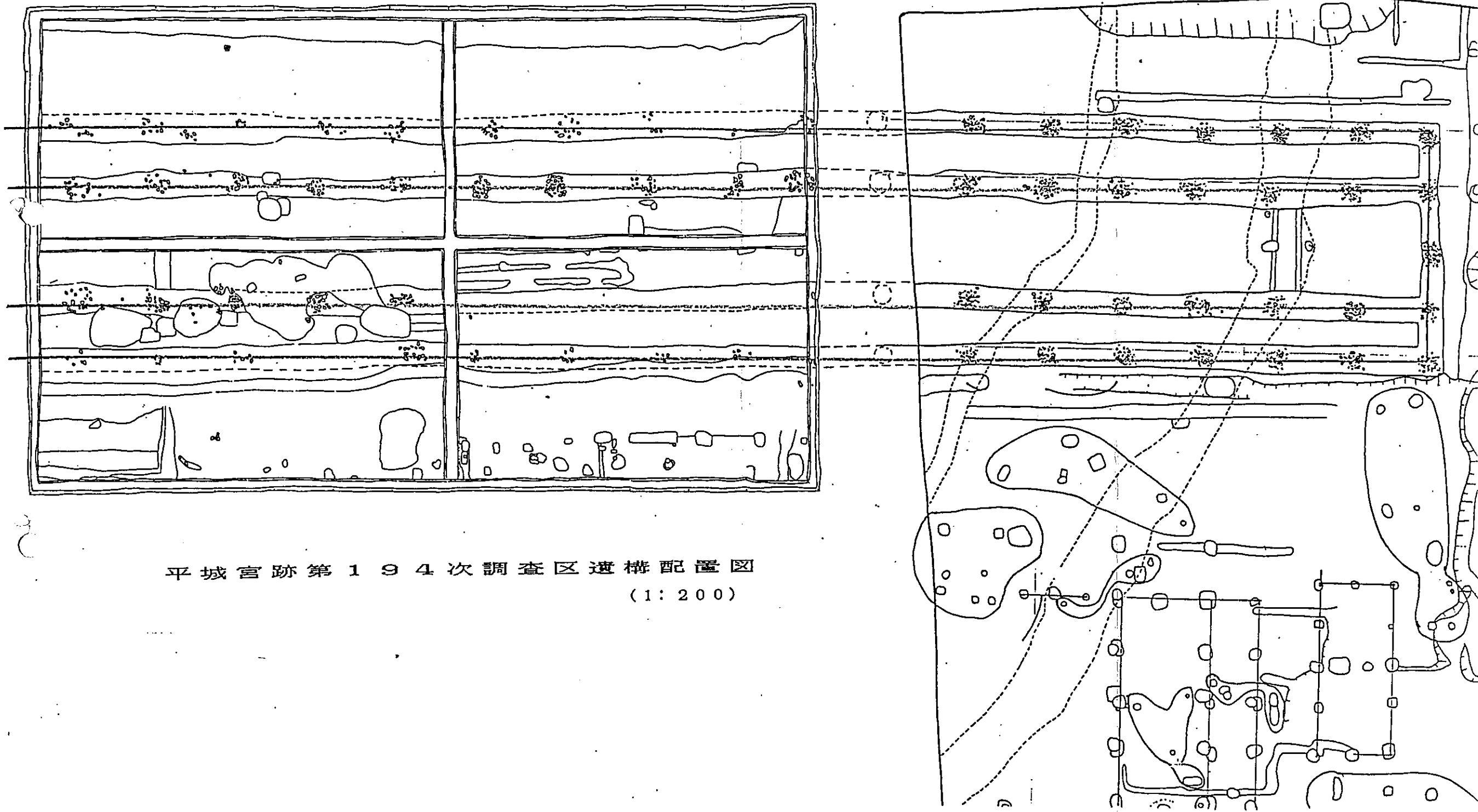
「西方官衙」地区ではないか、と考えられていたこの地域の性格について、再検討する必要が生じてきた。礎石建物と関係する殿舎は、東側に存在する可能性がおおきく、今後のその範囲を発掘調査することによって、この地域の性格があきらかになっていくことだろう。

調査区的位置



平城宮跡第37次発掘遺構配置図

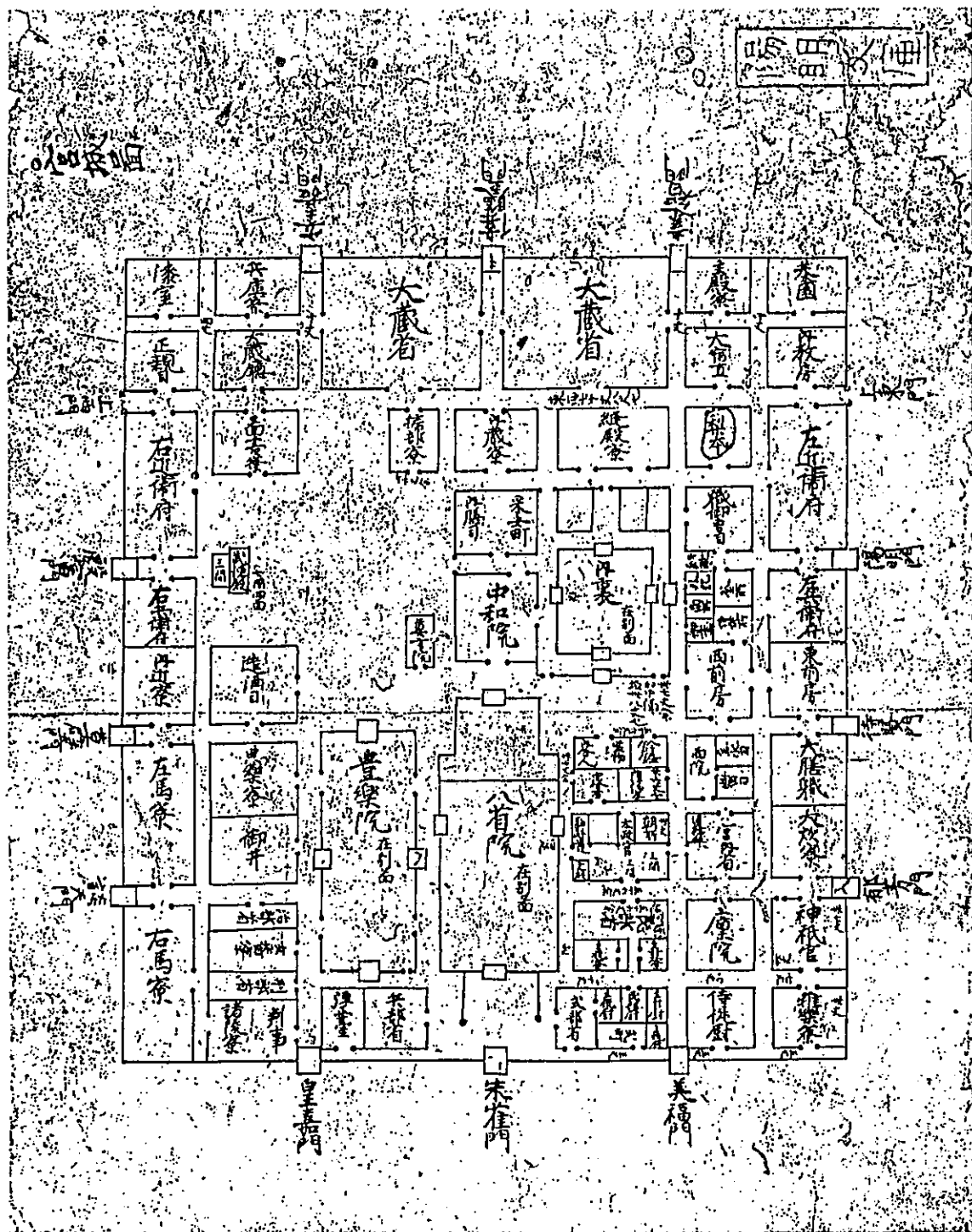




平城宮跡第194次調査区遺構配置図
(1:200)

104次礎石建物(SB5300)と第一次朝堂院東第2堂(SB8550)の比較

	SB5300	SB8550
平面類型	東西庇付き南北棟	東西庇付き南北棟
規模		
桁行間数	21間	21間
梁間間数	4間	4間
桁行総長	86.4m	92.4m
梁間総長	12.0m	13.8m
桁行1間	4.1m(14尺)	4.4m(15尺)
梁間1間	3.0m(10尺)	3.4m(11.5尺)
基礎		
桁行総長	?	≒97m
梁行総長	?	≒18m
高さ	?	≒1.2m
年代	II~III期	I~II期



陽明文庫本

平安宮宮城図(陽明文庫本)

礎石建物 平城宮の中心部分である朝堂院の建物は、礎石の上に柱を立てる礎石建ちだった。柱が礎石建ちであれば、基壇上に建ち、屋根は瓦葺であるのが一般で、寺院建築として中国・朝鮮から伝来し、宮殿建物として、宮の中心建物に採用されていった。礎石建物だと、雨漏りに注意し、火災・大嵐などの不幸な災害にさえ遭遇しなければ、法隆寺の宝塔のように、建物の寿命はきわめて長くなる。
写真 奈良国立文化財研究所(いずれも)イラスト・上野邦一

礎石建物 礎石建ちは、地中に埋まっている部分は、意外に腐らない。しかし、地表面のところでは腐食するので、建ててから20年から30年を経ると、礎石建物の寿命を終える。ほぼ同じ位置に、同じ規模の建物を建て替えているのは、こうした理由による。柱の根元を固定するために、根腐れを使ったり、柱の下に礎盤を置いたりした。右の写真は、礎盤に埋め込んだ柱で、手前が地中部分、中ほどが、地表面のところまでやや傾いている。

